＜書評論文＞

社会学理論の近代性

Kwan-Ki Kim,
Order and Agency in Modernity.
(State University of New York Press, 2003)

朝　田　佳　尚

1．本書の特徴

社会学理論研究には、時代がいかなるものかをつかむことが求められる。そして社会学にとっての時代とは近代であり続けた。このため、あらゆる社会学者によって近代は扱われてきた。本書「Order *and Agency in Modernity*」は、この近代というテーマを社会学理論自体から捉えようとする学説史に関する研究である[1]。

モダニティと社会学理論を結びつけて解釈する試みは他にもある中で、あえてそれをしようとする本書には別の特徴がある。時には対立するものとして別々に解釈されてきたパーソンズ、ゴフマン、ガーフィンケルという3人の社会学者をモダニティという時代背景からなら同じ線上で捉えられるのではないかという主張がそれである。

このとき当然考えられるのは、なぜこの3人なのかという点だろう。モダニティを理解しようとするなら、モダニティを研究の中心テーマとしている社会学理論を扱う方が効果的に思われる。しかし、著者であるKim自身は、自分の方法の可能性と解釈の有効性を述べてこの疑問に応える。方法の可能性とは、理論解釈は必ずしも明示された内容を扱うわけではないということである。ある研究者が主観的にはモダニティを扱っていなくとも、その研究者の思考枠組みの中にモダニティを見ることは可能ではないかとKimは考える。この目的をもって、3人の秩序と行為者（order and agency）像を見ていくのが、本書の言う理論研究なのである。また解釈の有効性とは、この研究を実行することが個々の理論

[1] 著者のKimは現在、韓国の成均館大学で社会学特別研究員と同社会科学研究所の研究員を兼務している社会学理論の専門家である。

の再解釈につながることだとKimは言う。

この3人の社会学者たちの共通性と個別に検討しただけでは見えてこなかった解釈の仕方が本書の主題であり、社会学説史研究に対する功績となる点だろう。そのことを以下順に明らかにしていきたい。まずKimの言うモダニティとはどんなものかを見ていく。また、これをどう応用して3人の理論家を解釈するか、その鍵となる概念を見ていく。これが本論の2にあたる。その次、本論の3、4、5ではそれぞれ3人の理論家をどう扱うのか具体的に見ていく。そして最後の6で、まとめと本書の評価と批判を行う。

2．モダニティの両義性

本書の冒頭では、ここで言うモダニティの特徴を確認するために社会学理論史が概観され、そこで共通して語られていたことが検討されている。それを通して示されるKimのモダニティは2つの概念で説明される。それが多様性と抽象性（pluralism, abstraction）である。

まず、多様性であるが、これはバーガーを中心に説明される。都市化、社会移動、市場経済などを通して近代では異質な者との出会いが増える。この異質との出会いが、当然視されていた世界の一体性を砕き、世界を別々の部分からなる相対的なものに変える。こうして不安定で一時的な場面に分割された世界の中で近代人は故郷を喪失し、常にさまよい歩くことになると指摘される。だが他方で、この多様性の進展は自由をもたらすものだともされる。なぜなら、世界の一体性の破壊は、現実を相対化する視点がもてるようになるとも考えられるためである。現実が不安定なものとわかることで、自己と他者の行為こそが現実を構築する方法であると経験できるようになるとKimは考える。

抽象性は、ナタンソンによるシュッツ解釈という手法で語られている。そこでは、抽象性は匿名性と類型化（anonymity, typification）という一見矛盾しているとも思える概念と結びつくと考えられている。ある具体的な対象を抽象化し、区分けすることは類型化と言えるが、そのとき類型化されたものは元の対象そのものとは違ったものになってしまう。類型化するということは、その類型として扱われる以外の具体的な個性の部分が切り捨てられているとも言える。このため、具体的な個性は匿名的なものとして扱われるようになってしまう。しかし他方で、この匿名化された個性は、あいまいなゆえに社会化をかいくぐる契機も手に入れるとKimは論じる。

多様性、抽象性は確かに個人の差異や特徴を消し、碇を降ろすことのできない海に近代人を投げ込むが、もう一方で平等をもたらすという作用がある。一と他を区別しない民主

的平準化がどこででも可能になるということである。このため、人種、エスニシティ、年齢、性、国籍にとらわれない自由を近代人は手にするとKimは言う。これが全体の指針となるKimのモダニティの特徴である。

また、これら2つの概念から派生する特徴が3つ触れられている。まず1つ目は、制度的秩序と人間との相互自律化（mutual autonomization）である。近代では、それ以前よりも制度的秩序に人間は拘束されず、自身で現実を構築するように自律化するが、逆に制度も、個人が多様で抽象的なため、特定の個人に左右されなくなるとKimは考える。同様のことから役割の弱化も起きるとKimは指摘する。これが2つ目である。役割を取得するというのも、制度によってではなく、相互行為を通してだということに近代人は気づくとされるのである。さらに3つ目として、制度的秩序の拘束力のなさがいま-ここの場面の重要性を高めると指摘されている。現実の認識はその場の中で構築されるようになるために、それなくしてはマクロな制度も成り立たないことが自明となるとKimは考える。

秩序と人間の相互自律、役割の弱化、いま-ここ場面の重要性は、お互い重なり合っているものの、それぞれが、パーソンズ、ゴフマン、ガーフィンケル3人を読み解く中心テーマとなっている。これにそって本書の後半では、それぞれの秩序と行為者の描き方がいかに深くモダニティの背景を背負っているかということが順に展開されていく。

3．パーソンズ再解釈

以下では、個別の内在的研究とは違うとされるKimの解釈を具体的に見ていく。

パーソンズといえば、社会システム論という名前が先行し、とにかくシステムの内面化とそれによる秩序の安定が主眼だったとされがちだが、Kimはパーソンズのシステム論は個人の選択にかなりの重点が置かれていたとし、視点の転換を促す。

パーソンズは、文化システムがもたらす価値が個人に共有されることで秩序が成り立つと考えた。このとき、価値の構成要素とされたのはいくつかのパターン変数である。そして、ここが重要な点だが、このパターン変数には、すでに決まった規範の複合体やシステムの一般的パターンがあるわけではなく、それは常に相互行為の中でどちらかが選択されるという構成になっていたとKimは解釈するのである。つまり、パーソンズの価値概念は特定の状況下の人間たちに依存しているとされるのである。一度制度化された価値であっても、再び特定の状況下で個人に選ばれ直すものとKimには捉えられているのである。同様に、規範概念も文化一般のうちの最低水準を決めるにすぎず、その中には疑問や再解釈の余地が残っているのであり、常に逸脱の可能性を残す概念だとKimは指摘する。

また、パーソンズの秩序指向を表すのによく引き合いに出されるもののひとつに、普遍的に共有されうる一般価値という概念があるが、これも実は、限られたものとパーソンズが考えていたとされる。それはどんな社会でも制度化されるものではないし、完全な意味での統合機能などもっていないとされる。なぜなら、そもそもパーソンズ理論が、ひとつの理念型として現実から抽象されたものであり、普遍的価値というものは極限事例に限られるものだとKimは捉えるためである。同様に、AGIL図式や均衡概念も理念型として提唱されたものと捉えられている。

このように、パーソンズ理論が目指していたのは秩序像の提示だとしても、広範な不確定性やあいまいさが含まれていたとKimは指摘する。「パーソンズが見ていた秩序とは、完全な秩序でもないし、完全に経験的な秩序でもない」のである（p. 41）。

パーソンズの描く個人像は、自由意志で相互行為を行い、秩序に変更を加える存在であり、秩序像は、拘束するものというよりは、個人に共通の基盤を与えて、それにより相互行為を可能にするという自由や主体性の源泉なのだとされる。ここで注意しなければならないのは、個人の側にも完全な自由は認められていないということである。個人の基盤はその個人自身の中からは獲得されるものではないのである。その点で、単にパーソンズの個人ファクターを強調するだけの既存研究とは性質を異にするとKimは考えている。

このような解釈から見れば、パーソンズ理論の社会-個人関係は、相互に影響を及ぼすものの、決定することはないために、社会と個人が相互に自律したものと考えられるのである。

4．ゴフマン再解釈

ゴフマン解釈でもKimは彼流のモダニティ解釈を適用する。ここでは、儀礼、相互行為秩序、フレームという3つの概念を通してそれが描かれる。

ゴフマンの特徴とされるのは相互行為の分析である。そして、その相互行為分析の対象こそが、ここで言う、モダニティの影響をまともにうけた世界だったとKimは解釈する。そこは、制度的秩序による役割付与が効力を失い、全ての役割は変更可能とされる世界である[2]。この世界の中で不確定性の重荷に耐えられない人々を分析したのがゴフマンだとされる。そして儀礼という概念は、この状況に対して一時の確定性を与えるものとして提示されたとKimは考える。不確定な中では混乱に陥る個人は、状況を定義し、そこに合わ

[2] ゴフマン研究において、役割が弱化していると捉えることには批判も多い。例えば（安川編 1991）を参照。

せること、つまり自ら構築した役割を取得することで安定感を得るとされるのである。この儀礼的均衡は一種の痛み止めとして捉えられている。

しかし、この安定の作り方はとにかく状況に合わせた結果でしかないため、不公平な結果をもたらす場合があるとゴフマンは見ていた、とKimは解釈する。この不公平さを描くために使われたとされるのが相互行為秩序概念である。この概念により、モダニティの秩序、つまり相互行為によって作られているがために、自己利益に基づいて行為を操作すれば、不公平な秩序ができる場合があるということが分析可能になったとKimは考える。

フレーム概念でも、上の2つの概念で語られてきた不確定性というテーマが取りあげられるが、ここではさらに自由の契機も語られているとKimは捉える。フレーム概念のポイントは、それが人の認識枠組みだという点である。認識枠組みとして描かれることで、主観は多層で壊れやすいという面だけが描かれるだけでなく、それが壊れやすいからこそ、絶えず現在のフレームが唯一ではないと考えられる面が出てくるとKimは見るのである。ゴフマンのフレーム概念には、主流となっているフレームに居ながら、それとは別のことを行うサブ・フレームという概念があるが、この主流外のふるまいが、まだ見えていない別のフレームを人々に気づかせるきっかけになる場合があるとKimは解釈する。別のフレームは現在主流のフレームの中では現実となってはおらず、説明されてもいないが、人々にそれがありうると思わせることができるために現在のフレームを超越する契機となりうるとされるのである。このようにフレーム外活動やフレームをずらすような行為やふるまいは不確定性であると同時に超越への契機としてゴフマンには捉えられていたとされる。こうして、フレームの壊れやすさはゴフマンにとっては両義的だったとKimには解釈される[3]。これがゴフマン理論におけるモダニティの影響とされるのである。

5．ガーフィンケルについての解釈

こうした解釈はガーフィンケルにおいても同様に継続される。ガーフィンケルについては、モダニティに付随する結果として挙げられた、いま-ここ場面の重要性という観点が、まさにガーフィンケルとモダニティの関係性を表すものだと解釈される。これが、ガーフィンケルのエスノメソドロジー紹介のような形で描かれる。

ガーフィンケルにとっては、実際の行為の現場に出てくる人々は、何らかの定式化を意識

[3] Kimが示した現実の多層性が超越と捉えられるかという点には議論があるだろうが、超越の契機があまり語られていない昨今の日本のゴフマン研究にとって、注目すべき視点を取り出しているとは言えるだろう。

上ではせずに、ひとまたぎにお互いを了解していると捉えられる。しかし、それまでのマクロな社会理論は理論上の定式化をその行為に適用しがちであったとされる。このため、実際の行為に含まれる多様な意味をうまくすくいだせず、現実から浮いていたのではないかというガーフィンケルの主張をKimは取り上げる。

こうして、ガーフィンケルは「解釈」を捨てる。ここで言う「解釈」とは、行為類型やすでにつくられた意味をミクロ場面に適用するという意味の解釈である。ガーフィンケルは、理論枠組みの解釈、適用という形で、それまで意識されずに行われてきたミクロ場面と行為者のモノ化を止め、具体的な人々が行為している中にもなお出てくる秩序、つまり見えているのに気づかない内在的な秩序を浮き上がらせるというところに焦点をあてる。このように、エスノメソドロジーをそれまでの社会学理論と対象化することで、マクロな社会学理論もそれ自体、エスノメソドロジーで見ることのできるひとつの秩序を示しているとガーフィンケルには考えられたとKimは指摘している。それまでの社会学理論、特にマクロな視点を持つ理論は、そこになぜ秩序があるかということを扱ってきたが、実は秩序があるかのように見えるというそれ自体が、その社会学を研究している人が秩序にとらわれていることに気づいていないことを表しているとされるのである。

あらゆる秩序はその場において見出される一時的、あいまいなものなのに、それを通時的、堅固なものとしているものこそ、ガーフィンケルの言う秩序なのである。「ガーフィンケルにとっては...社会秩序は一時的、相互依存的で（contingent)、瞬間のものなのである。それは夜空、つまりあいまいさという暗い空に光る花火のようなものである」(p. 100：...)。

このように展開されるガーフィンケル理論の中心は、一時性やあいまいさというKimの捉えるモダニティの概念と同一視できるものとされる。モダニティというマクロな構造を体現した社会学者として、逆説的にガーフィンケルが描かれるのである。

6．評価と批判

以上のような再解釈は、確かにオリジナリティのある試みである。しかしそれだけで理論研究として十分に意義あるものと言えるのだろうか。このことを考えるため、この3人でなくともこの研究は可能ではないかという本論冒頭で言及した疑問に立ち戻ってみよう。というのも、オリジナリティがあるというKimの反論だけでは解決できない問題が残るように思われるためである。

その問題とは、Kimのオリジナリティにはどんなアクチュアリティがあるのかというこ

とが、やはり問われるのではないかということである。なぜなら、もしアクチュアリティがなければ、3人が、近代の枠組みを暗黙裡に吐露していると解釈できたとしても、彼らは近代に住んでいたのだから当然だと考えられてしまいかねないためである。

つまり、ここで問いたいのは、近代の社会学者の共通点を軸に解釈を引き出すだけでは、その理論家が表す価値や描きたい社会の問題という現代の我々にとってもアクチュアルでありうる点が見えてこないのではないかということである。確かに、本書の方法のように本人の意図とは違った裏の解釈を提示し、それに意義がある場合もあるだろうが、それは、そのように外側から光を当てることによって見えてくる社会の問題があるということに、やはり言及できなければならないのではないか。

理論解釈というものは、これまで語られていない話をするということだけでなく、それを語ることに何らかの意義があるということにも関わっているのではないか。この点について本書は明確でないように思われる。そのため、Kimの反論はなぜこの3人かという本論冒頭の疑問に十分に応えきれていないように感じられる。

もし本書が得た知見をより豊富なものにしようとするなら、それぞれの理論の内在的研究に立ち戻って再び個別に解釈をすべきではないだろうか。

ただ、もちろん3人を結びつけることの重要性は認められるべきだろう。これまで対立するものとされてきた研究領域を結びつける視点が出てくることは、それを通して新たな現実認識をひらく可能性があるだろう。このような基礎研究を元にしてどのような現実認識が生まれ、どのような新しい社会理解や社会批判が生み出すことができるのかが理論に携わる者に問われている。

参考文献

Garfinkel, Harold, 1967, "Passing and the managed achievement of sex status in an "intersexed" person part 1," Studies in Ethnomethodology, Prentice-Hall: 116-185.（＝1987，山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳『エスノメソドロジー――社会学的思考の解体』せりか書房，215-295.）

Platt, M. Gerald, 2004, "Review: Order and Agency in Modernity," Contemporary Sociology: A Journal of Reviews 33(3): 369-371.

山田富秋・好井裕明，1991，『差別と排除のエスノメソドロジー――『いま-ここ』の権力作用を解読する』新曜社.

安川一編，1991，『ゴフマン世界の再構成――共在の技法と秩序』世界思想社.

（あさだ　よしたか・修士課程）